多摩市における高齢者デイサービスセンターの運営プログラム・活動の実態と利用構造

坊上南海子 —*1 山田あすか —*2
上野 淳 —*3

キーワード：
多摩市, 高齢者, デイサービスセンター, 利用者属性, 活動場面, 施設選択

Keywords:
Tama-city, The Elderly, Day Service Center, Attributes of Elderly Users, Activity Scene, Facilities Selection

INVESTIGATION ON THE PROGRAMS AND THE ACTIVITIES OF THE ELDERLY AT DAY SERVICE CENTERS IN TAMA-CITY

Namiko BOJO —*1 Asuka YAMADA —*2
Jun UENO —*3

The purpose of this paper is to grasp at the programs and the activities of day service centers in Tama-city, Tokyo. Observation survey was conducted 6 facilities. Analysis collected in the observations was focused on attributes of elderly users, programs and activities, and Day service selection by distance from users' house to the Day service center in each facility. Consequently conclusions about these were learned as follows: 1) The Programs and the Activities of 6 Day Service Facilities have many points in common. 2) Facilities selection is independent of distance from user's house to the Day service center.

1. 背景と目的

1.1. 背景と問題意識 高齢者デイサービスセンター（以下：DSC）は、障害や痴呆を持ちながらも在宅生活を継続しようとする高齢者及びその家族をサポートする基幹的な仕組みである。高齢化の進行が加速しはじめた我が国において、DSCが地域社会において果たすべき役割は今後一層大きくなっていくと考える。

筆者等の研究グループは、従来からその重要性に鑑み、DSCの運営プログラムや利用者の活動からみた建築計画の在り方などについて、継続的な研究を行ってきた¹⁾。又、既往研究には、将来人口推計から配置計画を論じたもの²⁾、送迎ルート进行调查したもの³⁾などがある。しかしこれらは、介護保険制度施行以前の福祉・措置制度の元でのDSCを研究対象としており、現状に適用可能な見解になっているとは言い難い状況が発生している可能性がある。言うまでもなく、2000年の介護保険制度によれば、利用者は施設を介護保険自己負担分等の一定の制限の中で選択できるようになっており、福祉・措置制度のもとによるDSCとは運営プログラムや利用構造等において変化が生じている可能性があるためである。

本報告での興味・関心は、

- 1) 利用者が施設を選択することが可能となった現制度下において、DSCの運営プログラム、利用者の活動様態に多様化を含む変化が起きているか
- 2) 利用者の施設選択の結果、利用距離や利用圏域などの利用構造はどのようなになっているか

の2点である。これらの解明は、今後のDSCの建築計画、及び地域における施設配置・ネットワーク計画に一定の知見を与えるもの

と考える。

1.2. 目的 以上から、本稿は多摩ニュータウンを市域にもつ東京・多摩市をケーススタディーとして取り上げ、そのDSCを悉皆的に調査対象として、利用者属性、運営プログラムの実際、利用距離等の利用構造を明らかにすることを目的とする。又、市域内全てのDSC施設を悉皆的に調査することで、要支援・要介護高齢者のDSC利用動向を把握しようとするのも目的の一つとする。多摩市におけるケーススタディーとしているが、ここでの知見の幾つかは他の自治体でも適用可能と考える。又、2005年の制度改正を前に介護保険制度が定着・安定し始めた時期の動向を捉える意義もあるものとする。

図1 多摩市の地区別高齢化率 (2004年6月1日現在)

*1 東京都都市整備局西部住宅建設事務所 修士(工学)
(〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1)

首都大学東京建築学専攻上野研究室

*2 首都大学東京大学院建築学専攻 日本学術振興会特別研究員・博士(工学)

*3 首都大学東京大学院建築学専攻 教授・博士(工学)

*1 Tokyo Metropolitan Gov., M. Eng.

*2 Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, School of Architecture, Graduate Schools of Engineering, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.

*3 Prof., School of Architecture, Graduate Schools of Engineering, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.

2. 調査の概要

2.1. 調査対象・多摩市の概要 本研究では、東京都多摩市を調査対象地域とした。筆者等の研究グループが継続して行っている「多摩ニュータウンの再生・活性化研究」の一環としての位置づけもある。多摩市の現在の高齢化率は14.8%（図1）であり、全国平均や東京都平均と比較すると低い。地区ごとに差異があり、20%を超える地区もある。また多摩ニュータウン内には1970年代に建設された中層集合住宅も多く、今後の高齢化率の上昇が大きな課題となっている。

2.2. 調査方法 多摩市内には2004年4月現在8つの登録DSC^{※1}がある。その中でDSCとしての基本的な運営がなされ、開設後一定期間を経て利用が安定している6施設を調査対象とした^{※2}。

調査は、以下の3つによって構成している。

- ① ヒアリング・資料収集による施設運営の概要、利用者属性の把握
- ② 終日観察調査による運営プログラム・活動実態の把握
- ③ 送迎車両への同乗による送迎ルートの実態把握調査。

調査対象各DSCの施設概要、運営上の特徴、スタッフ構成等を表

表1 調査対象DSCの概要

*1) 生きがいデイサービス：自立高齢者を対象として多摩市が独自に行っている事業。分析対象には含まない
*2) 実利用者：登録利用者のうち、ある1ヶ月間に実際にDSCを利用した人数

DSC名(略号)	Sa	Wa	Ha	Mi	At	As
施設概要						
運営主体	社会福祉法人	社会福祉法人	社会福祉法人	多摩市 (社会福祉協議会に委託)	多摩市 (生活協同組合に委託)	特定非営利活動法人
定員	50人(一般40・痴呆10) +生きがいデイサービス*1	40人(一般40) +生きがいデイサービス	50人(一般40・痴呆10) +生きがいデイサービス	30人(一般30)	30人(一般30)	6人(一般6)
内容	送迎 入浴介助(一般浴) 特別入浴介助(機械浴)	送迎 入浴介助(一般浴) 特別入浴介助(機械浴)	送迎 入浴介助(一般浴) 特別入浴介助(機械浴)	送迎 入浴介助(一般浴) 特別入浴介助(機械浴)	送迎 入浴介助(一般浴) 特別入浴介助(機械浴)	送迎 入浴介助(一般浴) 特別入浴介助(機械浴)
施設区分	併設型	併設型	併設型	複合型	複合型	単独型
併設の機能	居宅介護支援 訪問介護、通所介護 短期入所生活介護 特別養護老人ホーム	居宅介護支援 訪問介護、通所介護 訪問入浴介護 短期入所生活介護 特別養護老人ホーム	居宅介護支援 訪問介護短期入所 生活介護 特別養護老人ホーム 経費老人ホーム (地域に開放したホーム棟)	総合福祉センター内に立地 (センター内には、 心身障がい者福祉作業所 障がい者福祉センター 老人福祉センター 福祉機器展示などがある)	コミュニティセンター、 シルバーピアに併設	なし
各DSCの特徴	①浴室とデイルームが別階のため上下の動線が生じ、利用者の移動が不便である ②エレベーターや非常階段などが徘徊する利用者の目に入りやすい位置にある	①浴室とデイルームが別階のため上下の動線が生じ、利用者の移動が不便である ②ボイラーが古く、浴室から遠いため湯量に制限がある ③トイレが足りず、増設した	①一般浴室とデイルームが同一階にあり隣接している ②機械浴室は同一階にあるが離れている	①吹き抜けがあり、回廊型。見通しが悪く、死角がある ②トイレが廊下を回った位置にあり、遠い	①デイルームも食堂も区別のないワンルームタイプの1部屋で活動を行う。死角が殆どなく見守りしやすい ②浴室が狭い ③外に出られ、テラスでタバコが吸える	①商店街の空き店舗を改装して使用している ②オープニングでワンルームタイプのため利用者とスタッフ双方見通しがよい ③トイレが狭く、車椅子使用者が入れない
その他	食事後の休憩時には裁縫や歌など自分のしたいことができる。そのため用品はDSCに保管されている	入浴は週何回という限度がなく、希望の回数入浴ができる	壁のソファが自由時間に憩いの場になり、利用者に好評。日によって、午後のレクリエーションの時間は複数の内容から選択が可能	毎週1回、言語療法士による言語リハビリの時間がある。このリハビリが目的の男性利用者が多い。芝居のソファが憩いの場になっており、利用者に好評	介護予防のため体力を高める目的でパワーリハビリを導入している	ベデストリアンデッキに完全フラットで直結している。天気のいい日は公園へ散歩したり、近くのスーパーへ買い物に出かける
登録スタッフ数	生活相談員 常勤2 看護職員 常勤1 非常勤1 介護職員 常勤2 非常勤12	生活相談員 常勤2 看護職員 常勤2 非常勤2 介護職員 常勤1 兼務6 非常勤10	生活相談員 常勤2 兼務3 看護職員 非常勤2 介護職員 常勤5 兼務1 非常勤12	生活相談員 常勤1 兼務1 看護職員 常勤2 非常勤2 介護職員 常勤2 兼務1 非常勤7	生活相談員 兼務1 看護職員 兼務1 非常勤2 介護職員 兼務1 非常勤8	生活相談員 非常勤3 看護職員 - 介護職員 兼務1 非常勤17
1日の平均利用者数	39人	30人	41人	26人	18人	5人
実利用者数*2	113人	91人	135人	78人	58人	15人
1ヶ月の延べ利用者数	1,060人	824人	1,232人	692人	470人	90人
性別【人】	男性 30 女性 9	男性 24 女性 6	男性 41 女性 0	男性 29 女性 0	男性 18 女性 0	男性 5 女性 0
年齢別【人】	50-59歳 31 60-64歳 6 65-69歳 7 70-74歳 10 75-79歳 5 80-84歳 29 85-89歳 22 90-歳 20	50-59歳 5 60-64歳 8 65-69歳 10 70-74歳 16 75-79歳 32 80-84歳 20 85-89歳 32 90-歳 32	50-59歳 2 60-64歳 16 65-69歳 16 70-74歳 34 75-79歳 32 80-84歳 32 85-89歳 33 90-歳 33	50-59歳 34 60-64歳 8 65-69歳 8 70-74歳 19 75-79歳 11 80-84歳 13 85-89歳 12 90-歳 13	50-59歳 31 60-64歳 2 65-69歳 6 70-74歳 5 75-79歳 13 80-84歳 11 85-89歳 15 90-歳 11	50-59歳 31 60-64歳 4 65-69歳 7 70-74歳 2 75-79歳 7 80-84歳 2 85-89歳 2 90-歳 2
平均年齢【歳】	81.2歳	84.0歳	83.4歳	78.5歳	81.9歳	81.6歳
介護度別【人】	要介護1 3 要介護2 14 要介護3 16 要介護4 17 要介護5 6	要介護1 32 要介護2 14 要介護3 14 要介護4 8 要介護5 10	要介護1 32 要介護2 7 要介護3 37 要介護4 12 要介護5 14	要介護1 40 要介護2 3 要介護3 28 要介護4 17 要介護5 4	要介護1 20 要介護2 7 要介護3 19 要介護4 9 要介護5 22	要介護1 31 要介護2 7 要介護3 31 要介護4 2 要介護5 2
平均要介護度	要介護度1.3	要介護度1.5	要介護度1.3	要介護度1.1	要介護度0.7	要介護度0.7
週の利用回数【人】	1回 13 2回 24 3回 47 4回 10 5回 4 6回 1 その他 1	1回 13 2回 71 3回 15 4回 12 5回 3 6回 3 その他 3	1回 30 2回 50 3回 34 4回 12 5回 2 6回 1 その他 1	1回 21 2回 32 3回 16 4回 6 5回 2 6回 1 その他 1	1回 13 2回 31 3回 10 4回 3 5回 1 6回 1 その他 1	1回 7 2回 5 3回 1 4回 1 5回 1 6回 1 その他 1
平均利用回数	2.3回	2.3回	2.3回	2.2回	2.0回	1.6回(週4日間所)

1にまとめた。

3. 高齢者デイサービスセンターの利用者属性

調査①により、各DSCの一ヶ月の各実利用者^{注3)}の年齢、性別、要介護度、居住地（プライバシー保護の観点から町丁目単位^{注4)}）までの属性を捉えた。この概要を表1に併記した。

3.1. 性別・年齢構成 各DSCとも女性の利用者が60～80%と多く、年齢段階では75～84歳の後期高齢者が中心となっている。これらについての各DSC間の差は大きくない。

3.2. 要介護度別利用者構成と週利用回数 各DSCの実利用者

図2 年齢段階別にみた多摩市の要支援・要介護認定者割合

表2 年齢段階別にみた人口・要介護認定者数・DSC利用者数

要介護度	第2号被保険者(40～64歳) 50,460人				第1号被保険者 20,848人				合計 71,308人			
	年齢人口	DSC利用者	DSC利用者認定者	認定者年齢人口	年齢人口	DSC利用者	DSC利用者認定者	認定者年齢人口	年齢人口	DSC利用者	DSC利用者認定者	認定者年齢人口
自立	50,311人	-	-	99.7%	12,896人	-	-	96.1%	5,557人	-	-	74.8%
要支援	8人	0人	0.0%	0.0%	60人	1人	1.7%	0.5%	140人	20人	14.3%	1.9%
要介護1	45人	8人	17.7%	0.1%	211人	18人	8.5%	1.6%	616人	122人	19.8%	8.3%
要介護2	31人	6人	19.4%	0.1%	76人	18人	23.7%	0.6%	279人	78人	28.0%	3.8%
要介護3	23人	3人	13.0%	0.1%	57人	8人	14.0%	0.4%	263人	67人	25.5%	3.5%
要介護4	12人	2人	16.7%	0.0%	66人	15人	22.7%	0.5%	283人	38人	13.4%	3.8%
要介護5	30人	2人	6.7%	0.1%	57人	4人	7.0%	0.4%	287人	26人	9.1%	3.9%
自立以外計	149人	21人	73.5%	0.3%	527人	64人	12.1%	3.9%	1,868人	351人	18.8%	25.2%

図3 各DSCにおける1日の運営プログラムと活動内容

の平均要介護度は0.7～1.5の間に分布している。要介護度1の利用者が最も多いが、要介護度3～5の利用者も各施設に一定程度存在しており、比較的軽度の高齢者を対象としつつ、重症者のケアも同時に行っている状況が把握された。

各実利用者の週間の利用回数は平均2.3回程度となっており、週2回利用者が最も多い。DSC利用の平均的な姿と考えられる。尚、この週利用回数と要介護度、年齢段階との間には明快な関係は認められなかった。ここでも、これら各DSCの要介護度別利用者構成、週利用回数構成について施設間に大きな差異は認められない。

3.3. 要介護認定者数とDSC利用者人数 本調査では多摩市内の主要DSCを悉皆調査しているため、多摩市内居住のDSC実利用者の大部分を捕捉しているものとする。試みに、多摩市内の要介護認定者数とDSC実利用者の比較を概算した(表2、図2^{注5)})。ここでは、多摩市における要介護度別認定者総数に対する、一ヶ月に各DSCを実際に利用した要介護度別の人数の割合を求めている。

これによれば、一般に要介護度1の高齢者よりも要介護度2の高齢者のほうがDSCを利用する率は高く、

前期高齢者： 要介護度1＝約 9%、要介護度2＝約 2.4%

後期高齢者： 要介護度1＝約20％，要介護度2＝約28％
 となっている。同じ要介護度段階でも後期高齢者の方が利用の度合いは高い。尚，一般に各DSCの利用者は要介護度1の高齢者が最も多いことは前述したが，これは要介護度1の実人数が要介護度2のそれを大きく上回っていることに起因する。

4. 高齢者デイサービスセンターの運営プログラム

調査②では終日観察調査によって，各DSCがどのようなプログラムによって運営されているか，利用者の活動はどのように展開されているか，を把握している。

4.1. 各DSCの運営プログラムの概要

調査対象6施設の1日の運営プログラム，活動内容を図3に整理して示した。横軸に時間，縦軸に活動が展開されるスペース，凡例に活動内容を表現している。多摩市各DSCのプログラムの流れは概ね以下になっている。

[送迎] → [バイタルチェック] → [朝の会] (利用者全員の集会) → [入浴] (必須サービスではなく実施していない施設もある：併行して非入浴者の個別・グループ活動が展開される) → [静的レクリエーション活動] → [昼食] → [午後の休憩自由時間] → [動的レクリエーション活動] → [帰りの会] → [送迎]

各施設の特徴，時間設定，各プログラムの順序の前後，などの若干の差異は認められるものの，全体としての運営プログラムの内容は極めて類似性の高いものとなっていると判断される。

4.2. DSCにおける活動場面

上述のそれぞれの主要なプログラム活動の場への展開の様子を活動場面として図4にまとめた。又，これら主要な活動場面が調査日に各DSCで起こったか否かを併記した。これによると，以下のような点が確認できる。

- 1) 昼食後の自由時間以外では，利用者全体又は2,3のグループでの一斉展開が主であり，個々人や小規模グループでの活動場面は少ない
- 2) 主要な活動場面はどのDSCでも実施されており，一部の特徴的

図4 各DSCにおける主要な活動場面の施設ごとの有無及び事例

図5 各DSCの利用者分布(町丁目ごと・1ヶ月の実利用者)

図6 各DSCの80%利用圏域とボロノイ領域

図7 各DSCごとの距離と利用者累積出現割合の関係

なプログラム（施設Atでのパワーリハビリ）を除いては実施している活動内容には極めて類似性が高い

尚、一斉的な活動が主流ではあるが、こうした集団活動になじめない利用者が別行動をとっている姿も散見され、今後のDSC運営における課題と認識する（図4⑥）。

5. 高齢者デイサービスセンター利用者の地域分析と利用構造

調査①では各DSCの1ヶ月の実利用者の居住地（町丁目単位）を把握し、調査②では送迎バス同乗による送迎ルート把握等を行っている。これらにより、多摩市DSCの利用構造を整理・分析する。

5.1. DSC側から見た利用構造 各DSCの1ヶ月の実利用者の居住地分布を図5に示した。小規模な施設Asを除いた5つのDSCの利用圏は、ほぼ多摩市全域にわたっている。各DSCのボロノイ領域と80%利用距離を示した図6によると、各DSCの80%利用圏^(注6)は1.7～3.6kmに分布しており、他のDSCの利用圏域とほとんどの

地域で重複している。また距離別の利用者累積出現率を求めた図7によれば、施設Waを除く各施設の利用距離は、例えばコミュニティーセンターなどのような他の地域公共施設のそれとは異なり、単純に距離の2乗に反比例して減衰している訳ではない。

介護保険制度下におけるDSCでは、送迎サービスが必須項目になっており、マイクロバス等による送迎によって可能な限り広い範囲から利用者を集めようとする傾向がある。これら運営・経営上の背景がこうした利用構造の要因になっているものと推論される。

5.2. 地区側から見た利用構造 ここでは地区毎にDSC利用者の施設選択行動を検証してみる。町丁目ごと^(注7)の施設選択行動^(注8)を図・8に、地区ごとの施設選択状況を図9に示す。典型4地区の施設選択行動をまとめた図9によれば、それぞれ最近隣のDSCを選択する利用者が半数程度以上を占めるものの、一方で距離に関係なく他のDSCを選択する利用者に常に一定程度存在する事実が把握さ

図8 町丁目別にみたDSC利用者数と施設選択数

図9 地区別にみたDSC選択状況

図10 送迎ルート为例

れる。送迎サービスの及ぶ範囲までは距離とは単純な関係のない一定程度の施設選択行動が起きており^{注5)}、距離別利用者出現率が単純には減衰しない要因になっていると推論される。

5. 3. 送迎ルートと利用構造 送迎バスの実際の運行ルートの調査(図10)、送迎人数と運行距離・時間の調査(表3)を併せて分析すると、現実には必ずしも地区・方面別といった効率のよい送迎ルートが設定されているわけではないことがわかる。また、DSC側、利用者側それぞれの時間指定や着席位置の都合などが要因となり、場合によっては1時間近く乗り続ける利用者もいる。さらに、座席が足りず車椅子を座席代わりに用いることや、複数の車両で同一の町丁目を回ることもある。以上、現在の利用構造下での送迎は、DSC、利用者の双方にとって必ずしも適切なものとなっていない状況が認められる。

6. まとめ

東京・多摩市を対象としたケーススタディーではあるが、高齢者
デイサービスセンターの利用の構造について、要約以下のような点
が把握された。

- 1) 介護保険制度により利用者は施設を選択できるようになったが、一方、各高齢者デイサービスセンターの運営プログラムは現状では類似性が高く、各施設の特色あるプログラムが利用者の選択要因になっている訳ではないものと類推される。
- 2) 送迎サービスによって施設側からは可能な限り広い範囲から数多くの利用者を集めようとする傾向があり、80%利用距離は多摩市の場合、1.7～3.6 kmの範囲に及ぶ。利用圏域は一定時間内の送迎の及ぶ範囲によって決定づけられているのが現状である。

さて、今後の動向については、以下の諸点が研究課題として残されることになる。
- 3) 今後、DSC の数が増え、施設選択の幅が増えるとなると、各DSC の運営プログラムに独自性や特色が生じることになるか
- 4) 利用者の個性に合わせてDSC の特色・個性を選択することにな

表3 送迎にかかる実距離と時間 表中の(八):八王子市、(日):日野市

S 台数 中型バス ワゴン 乗用車						W 乗客日未使用 1便×1+2便×2=延べ5台 2便×1=延べ2台						H 乗客日未使用 1便×1+2便×4=延べ9台 乗客日未使用								
台数	1	4	1便×1=延べ1台 1便×1+2便×2=延べ5台			1	3	1便×1+2便×2=延べ5台 2便×1=延べ2台			1	6	1便×1+2便×4=延べ9台 乗客日未使用							
実際	距離	時間	利用者	内 乗椅子	送 迎 方 面	距離	時間	利用者	内 乗椅子	送 迎 方 面	距離	時間	利用者	内 乗椅子	送 迎 方 面					
1 便	8.0km	30分	4人	0人	通光寺,関戸, 一ノ宮	6.1km	32分	5人	2人	一ノ宮,関戸	12.4km	46分	7人	2人	豊ヶ丘,貝取 豊ヶ丘					
	8.0km	45分	5人	1人	聖ヶ丘,通光寺	9.0km	48分	5人	1人	関戸,桜ヶ丘,東寺 方,落川,百草	10.0km	29分	5人	2人	貝取,落合					
	7.0km	30分	5人	0人	関戸,通光寺,関戸	6.0km	26分	5人	0人	和田,(日)百草	4.0km	17分	7人	2人	中沢,唐木田,鶴牧 落合 (八)鹿島,愛宕 (八)鹿島 和田,(八)鹿島					
	14.0km	45分	4人	1人	貝取,永山,聖ヶ丘	13.7km	44分	4人	1人	永山,落合	8.0km	26分	5人	2人	山王下,豊ヶ丘,貝取					
	14.5km	75分	17人	2人	諏訪,永山,聖ヶ丘	5.8km	30分	3人	1人	東寺方,貝取	12.2km	55分	5人	2人	鶴牧,落合,南野 鶴牧					
2 便	9.0km	50分	6人	0人	桜ヶ丘,愛宕,和田	7.0km	33分	5人	0人	和田,東寺方, 桜ヶ丘,落川	12.0km	27分	3人	1人	永山,愛宕,乞田 鶴牧,愛宕,和田 (八)松が谷,(八)大塚					
	12.0km	40分	5人	1人	永山	5.0km	29分	4人	0人	一ノ宮,和田	12.0km	53分	6人	1人	落合,豊ヶ丘,落合					
	平均	10.4km	45分	7人	1人		7.5km	35分	4人	1人		8.0km	44分	4人	2人					
10.0km											10.0km	36分	6人	1人						
M 台数 中型バス ワゴン 乗用車						A 台数 中型バス ワゴン 乗用車						A _S 台数 中型バス ワゴン 乗用車								
台数	5	1便×2+2便×3=延べ8台					5	3	1便×2+2便×1=延べ4台					5	1	1便×1=延べ1台				
実際	距離	時間	利用者	内 乗椅子	送 迎 方 面	距離	時間	利用者	内 乗椅子	送 迎 方 面	距離	時間	利用者	内 乗椅子	送 迎 方 面					
1 便	14.0km	48分	5人	2人	諏訪,永山	16.0km	75分	8人	1人	愛宕,貝取 落合,(八)大塚	10.8km	61分	4人	1人	愛宕,永山,豊ヶ丘					
	17.0km	76分	4人	2人	関戸	2.0km	22分	1人	1人	愛宕										
	1.0km	9分	1人	0人	南野	12.0km	71分	7人	2人	桜ヶ丘										
	12.0km	48分	4人	1人	永山															
	16.0km	71分	5人	2人	豊ヶ丘															
2 便	8.0km	15分	2人	0人	(八)別所,唐木田	15.0km	47分	5人	0人	永山										
	10.0km	40分	2人	0人	豊ヶ丘,貝取															
	3.0km	13分	5人	2人	豊ヶ丘															
平均	10.1km	40分	4人	1人		11.3km	54分	5人	1人		10.6km	61分	4人	1人						

ると仮定すると、利用構造はどのようになるか

- 5) 単純に施設数が増え運営プログラムの画一性が続くと仮定すると、最近隣施設選択の原理が働き、現状より利用圏は狭くなるか今後も継続的に注視していきたいと考える。

本研究は、東京都立大学 21 世紀 COE プログラム「巨大都市建築ストックの賦活・更新技術育成」の一環として行われたものである。

注

- 注1) DSCを開設するには、各都道府県から介護保険事業者に指定されればよい。
多摩市では独自に市内を提供地域とする記載申請のあった事業者を市のHP上で公開している。ここではHPに記載されたDSCを多摩市登録DSCと定義した。
- 注2) 調査対象とした2施設のうち、1施設は当該施設が提供しているはり・きゅう治療にDS機能が付加された形態での運営であり、他のDSCとは運営の基本方針が異なると判断された。また他の1施設は、2003年に開設されており調査時点(2004年4月)では月間実利用者が3名と少なく、またこのうち多摩市内からの通所は1名のみであったため、他施設との比較に際して不適当であると判断した。
- 注3) 実利用者とは、DSCへの登録者のうち、実際にDSCを利用した人数を指す。
- 注4) 2000年国勢調査基本単位区別集計の基本単位区別人口重心の加重平均により各町丁目の重心を求めた。以降の利用距離の算定にはこの人口重心を用いた。
- 注5) 本来は65歳以上の1号保険者が給付対象であるが、2号保険者であっても特定疾病の患者であれば介護保険の給付対象となる。そのため、本研究でも利用者には2号保険者(40～64歳)を含めて想定している。
- 注6) 80%利用圏域とは利用者総数のうち80%の利用者の居住地を含む圏域を、施設を中心とした円の半径「距離」で表したものをいう。
- 注7) 丁目をあわせて地区とした。例：永山1～7丁目を永山地区とした。
- 注8) 各DSCの1日の利用定員は6～50名と幅があるため、各DSCの利用定員が同じと仮定した場合の地区ごとの選択率を求めた。
- 注9) 介護保険で送迎に支払われる料金は定額制のため、遠距離では採算が合わないが、入浴や他のサービスを含まれば、利用者が少ないより多少採算性が良いため、遠距離地区に居住する利用者も受け入れているのが現状である。

参考文献

- 1) 登張絵夢, 他利用者の活動からみた通所型高齢者施設の空間構成に関する考察, 日本建築学会計画系論文集 第556号, pp.161-168, 2002.06
- 2) 野坂正史, 他: 通所型高齢者施設の配置計画に関する研究—多摩ニュータウンの将来推計人口に基づくケーススタディー, 日本建築学会計画系論文集 第525号, pp.201-208, 1999.11
- 3) 岸洋一郎, 他: 送迎バス運行状況について—千寿園デイサービスセンターの事例—, 日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), E-1 分冊, 1997.09, pp.21-22
- 4) 有元美紀: 地域集会所施設の再配置計画に関する数理的研究—多摩市の将来推計人口をもとにして—, 東京都立大学建築学専攻修士論文, 2005.03
- 5) 国立社会保障・人口問題研究所, 日本の将来推計人口(平成14年1月推計)
- 6) 多摩市, 住民基本台帳 平成16年6月1日現在

[2005年4月20日原稿受理 2005年7月22日採用決定]